

第 14 回 デフリンピック運営委員会 (議事概要)

1 開催日時

2026 年 3 月 17 日(火) 15 時 00 分から 16 時 00 分まで

2 開催場所

戸山サンライズ 全国障害者総合福祉センター 2階大会議室

3 構成員等

○委員(構成員)

委員長 久松 三二(一般財団法人全日本ろうあ連盟 常任理事)

副委員長 薬師寺 道代(医師)

石原 保志(国立大学法人 筑波技術大学 学長)

小椋 武夫(一般社団法人山梨県聴覚障害者協会 事務所長)

畑中 淳子(弁護士)

松橋 早友梨(デフリンピック選手)

渡邊 知秀(東京都スポーツ推進本部長)

延興 桂(公益社団法人 東京都障害者スポーツ協会 会長)※欠席

○事務局

倉野 直紀(一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック運営委員会 事務局長)

4 要旨

【委員長挨拶】

(久松委員長)

- ・本日は、お忙しいところ、第 14 回デフリンピック運営委員会にご出席いただき、感謝申し上げます。
- ・今回は対面で薬師寺委員、小椋委員、畑中委員、オンラインで石原委員、松橋委員、渡邊委員が参加されている。
- ・私から、一言、ご挨拶を申し上げます。
- ・全日本ろうあ連盟の事務所からこの戸山サンライズまで歩いてくる途中に、昨年 11 月の東京 2025 デフリンピックを思い起こすような桜の木があった。桜＝デフリンピックというイメージが私の中に根強く残っていることを感じた。
- ・先日、パラリンピックが終了したところだが、今後は名古屋でアジアパラ競技大会が控えている。東京都からも何人か手伝いに行くというようなことも聞いている。その他にも、国内で国際スポーツ大会が様々開かれると思うが、このデフリンピックに関わったこと、またその経験値は非常に大きなレガシーであると同時に、国内の様々なスポーツ大会に波及することを期待したい。
- ・皆様、本日も多くのご意見やご感想をいただきたいので、よろしくお願ひしたい。

【議事進行】

(久松委員長)

- ・それではこれより次第に基づき報告に入る。

○報告(1)各委員会について

(久松委員長)

- ・まず、各委員会について、倉野事務局長より報告させていただく。

(倉野事務局長)

- ・利益相反管理委員会、コンプライアンス委員会、情報公開審査会、懲戒審査委員会を開催した。
- ・まず、利益相反管理委員会について報告する。
- ・利益相反管理委員会は、運営委員会の事業活動における取引の公正性や信頼性を確保するため、連盟理事、監事及び運営委員会の運営委員、運営委員会事務局職員の利益相反関係を審査する。
- ・3月6日に第10回利益相反管理委員会を書面で開催した。
- ・役職員等から提出された自己申告書や2025年第4四半期分利益相反管理チェックシートを審査し、全件利益相反やチェック箇所の内容に問題がないことを確認・承認された。
- ・次に、コンプライアンス委員会について報告する。
- ・コンプライアンス委員会は、運営委員会のコンプライアンスの推進に係る重要な方針の策定や啓発、連盟理事、監事及び運営委員会の運営委員、運営委員会事務局職員のコンプライアンス違反への対応について、運営委員会の諮問に対し審議し、意見を具申する。
- ・2月19日に第7回コンプライアンス委員会をオンラインで開催した。
- ・2025年度のコンプライアンス推進計画の遂行状況について問題ないことを確認・承認された。また、2025年度内部監査も適切に実施されていることを報告した。
- ・次に、情報公開審査会と懲戒審査委員会について報告する。なお、情報公開審査会への審査請求は0件、懲戒審査委員会への諮問件数も0件であった。
- ・3月10日に第2回情報公開審査会、3月13日に第2回懲戒審査委員会を書面にて開催し、運営委員会の解散に伴いそれぞれの委員会も解散になることを報告した。
- ・利益相反管理委員会やコンプライアンス委員会も運営委員会の解散に伴い、解散となる。

○報告(2)第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025 大会報告書について

(久松委員長)

- ・次に、第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025 大会報告書について、北島部長より報告させていただく。

(北島部長)

- ・本件については、1月に開催した運営委員会においてもご説明したところであるが、大会運営の軌跡を記録し、大会関係者へ報告するとともに、大会を通じて得た経験等をレガシーとして後世に継承していくことを目的として作成してきた大会報告書がこの度完成したため、改めて報告をする。
- ・大会報告書は、日本語版・英語版をそれぞれ作成しており、サステナブルの観点から、冊子版の発行部数は必要最小限に抑えている。
- ・日本語版は500部作成し、関係団体や協賛者、関係自治体等へ送付する予定である。英語版は30部作成し、そのうち15部はICSDへ送付し、残りについては関係者間で保管する予定である。

いずれも電子版については、3月25日にホームページ上で公開する予定である。

- ・なお、冊子版は近日中に刷り上がるため、納品され次第、委員の皆様へは追って郵送で送付をさせていただきます。本日は印刷した資料により報告をする。
- ・大会報告書の内容は、目次に記載のとおり、「大会概要」からはじまり、「大会前の取組」、「大会運営」、「大会スタッフ及びボランティア」、「財務」、「大会に向けた共生社会実現に資する取組」、最後に「レガシー」と、全7章の構成となる。後ほどご覧ください。

○報告(3)デフリンピック運営委員会の解散について

(久松委員長)

- ・次に、デフリンピック運営委員会の解散について、倉野事務局長より報告させていただきます。

(倉野事務局長)

- ・デフリンピック運営委員会規程第7条では、「運営委員会の体制及び運営に関して必要な事項は、この規程に定めるもののほか、連盟理事会の決議により別に定める。」と規定されている。
- ・3月7日、8日に当連盟理事会を開催し、今年3月31日をもって、デフリンピック運営委員会を解散することを承認いただいた。
- ・東京2025デフリンピックが成功裏に終えることができたのは、委員の皆さまにこれまでご意見やご助言をいただいたおかげであり、心から感謝する。

【意見交換】

(久松委員長)

- ・それではここで、出席者の方々から意見をいただければと思う。まずは、オンライン参加の石原委員から如何か。

(石原委員)

- ・筑波技術大学では、明後日に卒業式を行うが、そのタイミングで、東京2025デフリンピックで活躍した卒業生と在学生在に大学の表彰をする予定である。アスリートとして参加した学生のほかにも、多くの学生がデフリンピックスクエアで大会サポートスタッフとして活動した。学生からは、色々な方々と交流しとても良い経験となったという声を聞いている。彼らが今後社会で活躍することが、共生社会の発展に繋がる。このようにしてデフリンピックのレガシーが継承されていくと思う。

(薬師寺副委員長)

- ・まずは、東京都の皆様にご挨拶を申し上げたい。最初に、デフリンピックを招致しようと全日本ろうあ連盟の皆様と相談し始めた時、どこで開催するかなかなか決まらずかなりの時間を費やしたが、東京都が引き受けてくださったことによってこんなに素晴らしく大きな大会となり、非常に嬉しい。東京都、また、東京都スポーツ文化事業団の皆様にご尽力いただいたことに御礼申し上げたい。
- ・最初に全日本ろうあ連盟の事務所に伺った時、この人数ではデフリンピックを運営することは難しいと感じた。そこで、全国の自治体の皆様が応援に駆けつけたことにより人数も増え、全日本ろうあ連盟でもデフリンピックの運営をすることができたと思う。ご協力いただいた全国の知事会、市町村の皆様にも御礼を申し上げたい。
- ・本当に大変な10年だった。10年前は、倉野事務局長は東京にいなかったが、デフリンピックを何としてでも日本に招致し成功させたいと東京に駆けつけてくださり、久松委員長とともに3人で議員会館を走り回った日々を昨日のことのように覚えている。
- ・今回の大会は、約28万人の方々にご観戦いただいた。デフリンピックスクエアには約5万人の方々

にいらしていただき、最新の情報保障機器の体験や海外のデフアスリートの皆様とも交流していただいた。ろう者の皆様から、このような素晴らしい体験は自分の人生の中でも初めてで、一生の思い出に残るといった言葉を多くいただいている。長蛇の列でなかなか入場できないような会場もあるなどお叱りも受けたが、こんなに多くの方々にデフスポーツに興味を持っていただいたことの喜びも多くあるというお声を聞いている。先日講演に伺った長崎でも、その長蛇の列に実際に並んだ皆様から御礼の言葉をいただいた。

- 私どもも一生懸命尽力したが、まだまだ足りない点があることは確かである。次の大会に向け、きこえない、きこえにくい方々ときこえる方々が一緒に大会を運営していくことは難しいが、だからこそ工夫していこうじゃないかという気運を高めていきたいと思う。
- ここがまさにスタート地点である。そのため、次の目標を高く掲げながら、今後とも全日本ろうあ連盟の皆様とともに新しい共生社会を作っていくように、私も微力ではあるが尽力していきたいと思う。
- 皇后陛下の御歌に東京 2025 デフリンピックのことが歌われたが、こんなに光栄なことはない。御歌は前年度に一番印象に残ったことを歌として、全国、また全世界の皆様披露していただく場である。そこで、東京 2025 デフリンピックの水泳をご観覧いただいた時のことを歌っていただいた。それは、今後のデフアスリートの励みにもなるとともに、デフリンピックの周知にも繋がっていくと思う。これを誇りに私どもも益々頑張っていきたいと思うので、今後ともよろしく願い申し上げます。

(小椋委員)

- 東京都、東京都スポーツ文化事業団、全日本ろうあ連盟の皆様にご心から御礼を申し上げます。
- 少し前に発表があったようにデフリンピックの知名度が 73.1%ということだが、以前、私が全日本ろうあ連盟スポーツ委員長をしていた頃は、本当に低いパーセンテージであった。それが、あつという間に知名度があがり、大変嬉しく思っている。ただ、今回のミラノ・コルティナオリンピック、パラリンピックは、毎日テレビでハイライトなどが放送されるといった注目度であった。選手の頑張りが日々放送される状況であった。デフリンピックももう少し頑張らねばというのがあった。東京 2025 デフリンピックで得たレガシーを、どのように次の社会に繋げていくかが正念場だと思っている。
- 全日本ろうあ連盟の中には全国9ブロックの組織体があり、そのブロックの一つで体育大会が開かれている。11 競技という数にとどまっているが、東京 2025 デフリンピックのレガシーを取り入れながら、種目を増やすなど、ろう者の選手が多くの種目に参加できる機会を増やすことができればと思う。
- 社会全体として、ろう者の選手への支援も増えていくことになると思う。共生社会が実現できるよう皆様と結束して、これからもさらに活動を推進していく必要があると感じている。今後とも是非よろしく願いたい。

(畑中委員)

- 最初に委員会がスタートした時は、世の中的にスポーツ大会への風当たりが強い時期であった。全日本ろうあ連盟、東京都、東京都スポーツ文化事業団の皆様がこれだけきちんとしたガバナンスを構築されたことは本当に大変だったと思う。一から規則を作り、コンプライアンス委員会や利益相反管理委員会など諸委員会の人材を見つけ、問題なく終われたことは皆様のご尽力のおかげだと思う。
- 最初はデフスポーツやデフリンピックについてほとんど何も知識がない状態で、どのような雰囲気になるのかも分からないまま本番を迎えたが、良い意味でデフリンピックだけ特別という感じはなかった。きこえる、きこえないに関係なく、スポーツが持つ価値は一緒であると感じた。選手の皆様が

精いっぱいプレーをされている姿を観た方々に心を動かすものを与えるというのは、パラリンピックであってもデフリンピックであっても、どのような人がするスポーツであっても変わらず一緒なんだと、自分自身が気付けたことも大きな収穫であった。

- ・皆様がおっしゃったとおりこれがゴールではない。やはりデフリンピックの知名度は他の大会に比べるとまだまだ低いと思うので、これで終わりではなくデフスポーツ自体をもっと盛り上げていくことを皆様で考えていけたらと思う。

(松橋委員)

- ・デフリンピックは日本開催が初めてということで、認知度が非常に上がったことが一つの成果だと思う。
- ・私はデフアスリートの立場でこちらの委員会に出席しているが、やはり日本で初めて開催されるデフリンピックでは、日本のろうの子どもたちに、海外からもデフアスリートが来て競い合っている大会を直接観て応援したり、これがデフリンピックなんだということを知ってもらったりすることで、将来デフリンピックの選手になりたいというような夢を与えられたのではと思う。これから、デフリンピックの選手になりたいという子どもたちがもっと増えることを期待している。
- ・足かけ 10 年ということで、準備段階から見えないところで様々なご苦勞があったと思う。無事に終わったことは、関係者の皆様方のご尽力があったからであると思う。感謝申し上げます。

(渡邊委員)

- ・皆様と一緒に笑顔で今日を迎えることが出来たということが本当に感無量である。委員の皆様も仰っていたように、本当に良い形で大会を終えることができた。会場も大変盛り上がり、選手にも活躍していただいた。最も成功した国際スポーツ大会として、我が国のスポーツの歴史に刻まれる大会となったのではと改めて思う。
- ・一方で、大会は終了したがこれで終わりではないというのは東京都も同じ思いである。レガシーとして残していくということで、例えば、アスリートや競技団体の支援も来年度以降しっかりと継続していきたいと考えている。また、ユニバーサルコミュニケーション(UC)技術については、今回初めて触れたという方が多かったかもしれないが、その社会実装に向けて、都の施設への配備や区市町村への支援などを行いながら、引き続き、より社会に広げていく努力をしていきたい。
- ・東京 2025 デフリンピックの運営を担った東京都スポーツ文化事業団に、この4月からスポーツコミッション TOKYO という新しい組織を作ろうと考えている。今回、大会準備・運営や関係者の教育施策など様々な知見が残ったので、それらを残し、今後の国際スポーツ大会を担う人材を育てるためにそのような組織を作り、広く次に伝えていきたい。いずれまたデフリンピックが東京や日本で開催されるよう、あるいは他の様々なスポーツ大会が開かれるよう、ノウハウと人を次に繋げていく。そういった形でしっかりとレガシーを残していきたいと思うので、皆様、ぜひ引き続き東京都に対してお力添えいただきたい。
- ・改めて、ここまで皆様と一緒にやってこられて良かったと思う。皆様に深い敬意と感謝を申し上げます。

(久松委員長)

- ・ここで、本日欠席されている延與委員からご意見を頂戴しているので、代読させていただきます。

(延與委員からの意見)

- ・東京 2025 デフリンピックは、ろう者スポーツの発展に大きく寄与しただけでなく、きこえる人たちにとって、ろう者の文化や手話に初めて接するかけがえのない機会となり、その社会的意義は想像を超えるものとなった。この大会の成果を一過性のものにしないうえにも、成果に甘んずることなく、前進し続けることが必要である。

- ・東京都及びスポーツ文化事業団の皆様には、ラグビーワールドカップ、東京 2020 大会などの経験を活かし、十全な大会運営に尽力されたことに心から御礼申し上げます。東京 2020 大会以降も手を緩めず、障害者スポーツの振興を推進してこられたことが今回の成功の礎だと思う。今後もますます様々な大会、とりわけパラスポーツの国際大会の開催にご尽力いただき、スポーツ全般の発展を支えていただけるようお願いしたい。
- ・全日本ろうあ連盟スポーツ委員会の皆様には、大会の成功、特に日本代表選手団の大活躍に心から敬意を表したい。初の日本開催をきっかけに参加選手の幅が広がった。今後とも、手話言語を使わない人や障害者手帳の対象でない人などを、幅広くデフスポーツに迎え入れることが重要だと考える。また、大会の成功には、きこえる人たちの競技団体の尽力が不可欠であった。この協力関係を大切に育てていく必要がある。ぜひ、大会の成果と今後の課題を分析し、今後の発展に向けた制度改革や新たな取組をお願いしたい。
- ・東京都障害者スポーツ協会としては、東京都、東京都スポーツ文化事業団、全日本ろうあ連盟のご協力をいただきながら、多くの聴覚障害者がスポーツに親しみ競技力を磨く取組を全力で実施してまいり所存である。
- ・私個人としては、何より、運営委員会に入れていただいたことに心から感謝申し上げます。運営委員会の議論を通じ、また様々なイベントや大会の応援をさせていただき、楽しく勉強になった。とりわけ、手話言語の豊かさやデフコミュニティの連帯を知ることができたことは、私の人生観を変えるほどの出来事だった。大会後、手話言語の勉強を再開した。できれば 2027 年のオーストリア、2029 年のギリシャ大会に応援に行ったり、それ以外でも今大会を通じて知り合ったデフコミュニティの皆様と様々な場面でまた一緒にしたいと思っている。

(久松委員長)

- ・他にご意見等はあるか。

(薬師寺副委員長)

- ・YouTube での競技配信、国際手話と日本手話言語での解説をいつでも見ることができることは、今までのデフリンピックにないことである。観戦に来られなかった方やもう一度あの感動を味わいたいと思っている方々のためにも、是非、全日本ろうあ連盟の HP でももっと公開していただきたい。競技会場の解説者は、そのスポーツに精通したプロの解説者の方々である。その方々が専門的な知識や臨場感のある解説をしてくださっているので、是非そこを楽しんでいただきたい。
- ・もう一つお願いがある。今大会は日本だからできたのだということで終わらせてほしくない。今回、日本で初めて実施したことが様々ある。YouTube での発信や解説、デフリンピックスクエアをあれほど充実させ新しいテクノロジーを世界へ向けて発信する場を設けたこと、文化を紹介し教育を充実させたこともデフリンピックでは初めてのことである。東京 2025 デフリンピックをモデルケースとし、実施したことを今後も継続できるようにするためにはどうしたらよいのか、何が必要かということ、日本から ICSD へ発信していく必要がある。皆様のお力を得ながら私も尽力していきたいと思っているので、ご協力をお願いしたい。

(久松委員長)

- ・最後にオブザーバーの越智様、清水部長、北島部長、板倉部長より一言頂戴したい。

(オブザーバー・越智氏(東京都聴覚障害者連盟 事務局長))

- ・今まで運営に直接的に関わることはなかったが、地元の東京都聴覚障害者連盟よりオブザーバーとして運営委員会に参加させていただいたことに感謝申し上げます。また、デフリンピックを東京都で開催できて良かった。

- ・皆様がおっしゃったように、デフリンピックは開催して終わりではなくこれからが大事であると強く思っている。1991年、東京で世界ろうあ者会議が開催されたが、そこを契機に拍手の手話表現が日本中に広がっていった。同様に、サインエールをこれからも普及していきたい。きこえる人の社会の中に浸透させ、普通の競技会場においてもサインエールが当たり前に見られるように、5年後、10年後にデフリンピックのサインエールが誰でも分かるように、そういったレガシーを伝えていけるように頑張りたいと思う。

(北島部長)

- ・大会運営にあたって我々が一番考えていたことは「安全」で、関係者の皆様が安全に今大会を終えることであった。今大会の運営自体は、東京都、東京都スポーツ文化事業団、全日本ろうあ連盟の三者で行ってきたが、ここにいらっしゃる運営委員の皆様、筑波技術大学の石原先生と学生の皆様、全ての関係者一人一人が力を尽くした結果が今大会の成功だと思っている。運営主体の三者だけではなく、多くの関係者の方々の思いや行動を10年という長きに渡り積み上げられた結果であると思う。
- ・今回は天の力も味方したと思う。開閉会式も含めて13日間、ほぼ晴天であった。これだけ晴天に恵まれ気候も良かったのは、皆様の思いが通じたのではないかと思う。全ての関係者の方々一人一人が手を抜かなかったこと、その積み重ねによって今大会が安全に運営できたのだと思う。改めて全ての関係者の皆様に感謝申し上げたい。

(板倉部長)

- ・今大会の業務を通じて、色々なメディアや企業の方々と関わらせていただき、通常の公務員ではできないような貴重な経験をさせていただき本当にありがたいと思っている。全日本ろうあ連盟をはじめ、色々な方と業務やお話をする中で、デフリンピックやデフスポーツの持つ力やそのポテンシャルの高さを非常に実感した。最初は「デフリンピックって何？」という感じだったが、徐々に言葉が浸透していき、メディアにも取り上げられたり多くの企業も集まってきたりし、これはやはりデフリンピックやデフスポーツの持つ力の大きさという部分が一番大きかったのではと思う。この盛り上がりは今後も続いてさらに発展するように、自分の立場でできることをやっていきたいと思っている。

(清水部長)

- ・東京都としては、大会後もレガシーを継続して様々な取組をやっていきたいと考えている。
- ・私個人としては、大会開催が決定する前から関わらせていただくことができた貴重な4年間であった。色々と力不足の点もあったと思うが、久松委員長、倉野事務局長をはじめ全日本ろうあ連盟の皆様と一緒に仕事をやってきたことは本当にかげがえのない経験になったと思う。
- ・当然、色々意見がぶつかること、立場の違いやコミュニケーションの難しさもあった。しかし、そのような中で、我々も全日本ろうあ連盟の抱えている立場などを一生懸命理解しながら進めてきたつもりであり、久松委員長と倉野事務局長にも都側の立場を考慮し進めていただいた。その結果、一緒に良い仕事ができ、良い大会にできたのかなと思っている。
- ・大会が終わり、私も違う仕事に就くことになるが、この経験をどの部署に行っても忘れずに、様々な事業を進めていくうえで生かしていきたいと思う。本当に貴重な4年間であった。

(久松委員長)

- ・皆様には、今後とも引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げたい。
- ・これをもってデフリンピック運営委員会を閉会させていただく。ありがとうございました。